

[5] 我孫子市立根戸小学校 生活科授業活用事例 (2024 年度)

我孫子市立根戸小学校(児童数 677 名)では 1 年生(106 名)の生活科の授業で、例年『ようこそ 秋祭りへ』の単元を学習しています。小学校に入学して半年に過ぎない児童たちが、体験で主体的に学ぶ生活科科目の単元のここでの目標は、「身近な自然を利用したり、身近にあるものを使ったりして遊ぶ活動を通して、遊びに使うものを工夫して作ることができ、その面白さや自然の興味深さに気付くとともに、みんなと楽しみながら活動することができる」ことです。

校庭で児童たちが落ち葉や木の実、草花を探して、「秋探し」に行き、季節の変化を感じるところから授業はスタートしました。

子供たちは「秋で楽しく遊ぼう」との目標を定めます。

授業計画に従い、児童たちが主体的に、グループ毎に「秋まつり」を計画し、どんぐりや、まつぼっくり、落ち葉などを用いて遊び方の工夫や遊びのルールづくりを行い、児童たちならではの「秋まつり」を楽しみました。その後、単元のまとめとして、自分たちが使用したどんぐりを詳しく調べる「どんぐり博士になろう」という学習に臨みました。

3 クラスの内、1 クラスは担当の先生が学校図書館教育担当を兼務しており、我孫子市教育研究会学校図書館教育部会で我孫子市立図書館から紹介された美手連開発のデジタル教材『船戸の森とどんぐり』に興味を持ちました。

『船戸の森とどんぐり』は、第 1 章が小学校低学年向けに作成されています。1 年生～2 年生を対象とする『生活科』の授業に合致しています。我孫子市で見ることができるどんぐりに絞って児童たちが自ら調べ学習をすることができるようになっています。

印刷して児童たちに配布することもでき、児童たち自らが「秋まつり」で使ったどんぐりに関して調べることが出来、生活科の学習の最適教材の一つと考えられます。図書館の司書の先生にも T2 として授業に参加してもらい、どんぐりやまつぼっくりの図書の紹介や読み聞かせも行い、デジタル教材を用いて、秋まつりで使用した実際のどんぐりやまつぼっくりと見比べながら、まとめ学習を行いました。その結果、「どんぐり博士になろう」という学習目的への達成感を 1 年生なりに感じてもらうことができたということです。



『単元の最終フェーズでこの教材の存在を知ったためまとめの段階での活用となりましたが、単元の導入時点で存在を知っており、活用できたならば、単元のより早い段階で「秋まつり」の企画段階で児童たちからもっと違ったアイデアが出てきたかもしれません。』と担当の先生は感想を述べられました。

児童たちに自由に活動させながら、様々なことに気付かせ、児童たち自らが主体的に学びを体感してもらう『生活科』の学習教材として、デジタル教材は効果的に活用できる余地が大きいと担当の先生は感想を述べていらっしゃいます。

低学年でもタブレット端末を活用できるように導き、他のデジタル教材に関しても事前に調べ、児童たちにも紹介し、今後、より積極的に活用して行くことでより成果が期待できると担当の先生は仰っています。